

研究会	「アジア地域統合セミナー試論」金曜セミナー
テーマ	グローバリゼーション下の内政・外交と地域秩序
報告者	天兒慧（アジア太平洋研究科教授）
日時	2007年12月21日（金）16時20分～18時
場所	早稲田大学19号館609教室
参加者	篠原初枝（アジア太平洋研究科教授）、松岡俊二（同教授）、園田茂人（同教授）、植木（川勝）千可子（同准教授）、各フェロー、院生など。

報告概要：

このテーマは、近年顕著に見られる内政と外交のリンケージ現象、またライジング・チャイナが地域に与える影響についての関心から派生したものであり、研究プロジェクトの対象は以下の3つに設定されている。第1は、グローバリゼーション進展以前の国民国家システムにおける国内・国際秩序観を確認すること、第2は、グローバリゼーションが国家を弱体化、国内秩序を不安定化したかを考察すること、そして第3は、国際秩序と国際秩序のそれぞれの変動の因果連鎖を検討することである。

1について、石田淳は、国内秩序とは「個人の存在を与件として個人から構成される」（『国際政治』147号）であり、国際秩序は、国民国家が中心的アクターとして存在し、それらのインターアクションによって安定的な状態が維持形成されること、と見る。石田が強調する「国際秩序の変動を国内秩序と相互関連付けて解明する視点」の必要性を否定しないが、この理解は単純、茫漠としており、具体的事象の理論的理解には不十分ではないかと思う。そこで、国内秩序と国際秩序のダイナミックな連動性、共振現象に着目して議論を立てたのが以下に述べる2と3である。

2で問われているのは市場のグローバル化である。つまり、経済の国際化や相互依存の進展により国民経済が崩壊するなかで、国家が産業・経済の何を守るのかが問われている。また、人の移動、情報のグローバル化は国境の壁を劇的に低くし、ナショナルなアイデンティティや国民意識が相対化されている。さらに、環境や非伝統的安全保障における国内的イシューでも国際協力を不可避とする範囲が急増している。このような国内・国際社会の変容と流動化は社会の不安定化をもたらし、ガバナンスを変質させた。つまり、関係アクターが多様化し、そのアクターのレベルもグローバルからローカルまで重層化している。また、格差拡大がグローバル化し、国家から排除される「負け組」も出てくる。では「国家が死滅するのか」といえばそうではない。アクター相対化の中でも国家は主要アクターとして機能し続け、どうやってグッド・ガバナンスを実現するかを考える。国際社会においてもグッド・ガバナンスが求められる。そこに道筋を立てられた国家は機能的、体制的に安定する、と理解できる。

3はプロジェクト最大のテーマであり、問題整理のために、あえて理論的フレームワークを使いたい。リアリズム的説明だと、ある国家の国力増大というパワー・トランジションによる秩序再編成ということになるが、この場合、国内パワーの要因や構造、制

約性を考えない。リベラリズム的説明だと、国内・国際社会の構造変容に伴う国家間の利益配分の変化、調整による秩序再編成、ということになる。ネオ・リベラリズム的説明ではマルチ・複合的相互依存の構造化である。利害共有の重層化が促進され、価値（たとえば民主主義）も共有される。制度化によらずともデファクトとして秩序が再編されていく。コンストラクティビズム的説明によれば、複数アクターの相互作用の結果として生まれる構造が共通のアイデンティティ、規範を形成し、必ずしも国家によらずとも新しい質の秩序が生まれる。制度論の草分けであるオラン・ヤングによれば、レジーム形成は、強制に裏付けされるか、交渉を通じてか、自然発生的であるかだというのが、それぞれリアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムを通じての考え方のように思われる。

アジアの地域秩序形成の具体的ケースを分析する際には、どの理論を使うのか、複合的なのか、あるいは他の要因の可能性、たとえば、「和諧社会」「以和為尊」などアジアの思想・文化的側面を検討する必要があるだろう。

記録：平川幸子（GIARI アジア地域統合フェロー）

編集：高橋華生子（アジア太平洋研究科助手）